

中学生による災害体験の伝承方法としての体験災害マップの作製

愛媛大学 フェロー ○森 伸一郎 愛媛大学 非会員 濱田 優人
宇和島市立吉田中学校 非会員 河野 美佳

1. はじめに

自然災害により大きな被害を受けた地域では、しばしば、言い伝え・石碑・記録などにより、その顛末や教訓が災害伝承として後世に伝えられる。しかし、伝承の範囲が広がらなかったり、後世に伝わらなかったりする例が少なくない。平成30年7月豪雨は、西日本豪雨とも呼ばれ、愛媛県では多くの洪水災害・土砂災害が発生した。昭和18年7月豪雨では愛媛県は今回の豪雨と類似の大被害を受けながら、伝承がなされていない地域が多い。今回の豪雨では、宇和島市、特に吉田半島では洪水災害・土砂災害の両面で人家・柑橘農地に、おびただしい被害が発生した。この災害による被害・復興の体験を地域で広く共有し、後世に伝承することが重要である。そのことを適えることと防災学習を通じた地域学習を実践することを目標にして、吉田中学校の中学1年生を対象に「総合的な学習の時間」（総合学習と略す）を利用した年間授業の一環とした災害伝承と学習を試行して、災害体験を経験した中学校での教育・学習のパッケージを開発した。著者らにより最終提案された教育・学習パッケージ案に基づき、中学校の教師5名による指導、生徒59名の実践により、36名分の住民に対する36枚の体験災害マップを作製し、作品の発表会まで到達したので、それを報告する。

2. 体験災害マップ作製を中心とした教育・学習パッケージ

吉田中学校から、今回の豪雨災害を契機として、防災学習をしたいという要望を2019年2月に受けて、第一著者が、以下のコンセプトを同年4月に提案した。中学生の住む地域の住民の災害体験を知り、それを追体験して共有し、それぞれの地域での災害体験を広く知ること、しかも、それらが付与されるものでなく、自分たちで掘り起こすことにより、より深く知って理解することができること、ということを目的として、今回の豪雨災害を核にした「学習者中心の防災教育」の実現を図ることが基本コンセプトである。

上述の基本コンセプトを実現する教育・学習パッケージは、災害体験インタビュー対象住民の選定と交渉、住民インタビューの実施、インタビュー記録のトランスクリプト作成、エスノグラフィー作成、写真の入手・整理・選択、体験災害マップとしての総合化、マップ発表会などの学習要素で構成した。

このパッケージの基盤は災害体験インタビューであるため、「災害インタビューの手引き」を作成した。住民が体験した災害の顛末、災害発生時の行動の詳細、被害の詳細、被害に対する受け止め、災害発生時・発生直後・1年後の気持ち、などを聞き取るため、質問項目は、被害の質問票調査の回答結果としてでも使えるように構造化インタビューとしてデザインした。

3. 実践

基本コンセプトを中学校授業の枠組みで具体化するため、総合学習の主任教師との入念な打ち合わせをするとともに、著者の一人が総合学習の授業を通して、コンセプトと手順を段階ごとに教師・生徒に伝えた。最終的に地区単位で進めるため、地区ごとに12班（班員数は班で異なる）に分けた。また、実践の初期には小中学校の元校長等で組織された一般社団法人コミスクえひめの支援も得た。

住民インタビューの実施に先んじて、中学校隣接した重度に被災した地区の住民6軒9名を対象に、7月初旬、愛媛大学・NPOの同席支援の下で教師・中学生による試行インタビューを実施した。インタビューの前に、班ごとに全体の進行をチェックする「ディレクター」、手引きに則って質問する「インタビュアー」、インタビューの様子や被害の説明状況・痕跡を撮影する「カメラマン」、インタビューの回答内容を記録する「記者（メモ係）」の役割を決めて班員全員が役割を持つこととして実施した。インタビューの結果は主にタブレット端末（中学校授業で使用）、ときにボイスレコーダーで音声と動画を記録した。インタビューの後の授業では、振り返りの発表をさせて、それぞれの役割やインタビュー全体の感想を述べることで、経験の共有を図った。

試行インタビューの成果であるボイスレコーダーとタブレット端末の記録から、愛媛大学側でトランスクリプト作成（文字起こし）を行い、テキストを電子化した。また、それらから、何がわかるのかを示し、その後の各地区での各班の本番住民インタビューについて企画・計画するように指示した。対象住民の選出、インタビュー受諾のお願い・日時調整などを生徒が中心となり、教師がそれを支援する形で進め、夏休みを挟むようにして7月から9月にかけて実施した。災害体験から1年ほど経過した時点に相当し、ある程度、精神面や生活面で落ち着きを取り戻した時期であり、災害を客観視できる時期という好時期であると考えられる。遠隔地では通学は通学バスとなるため、日程・時間調整では、考慮すべき事項が少なくなかった。

9月からは、本番住民インタビューの結果をトランスクリプトにする作業を生徒が統一横掛け紙に鉛筆を用いて実施した。この作業のためには、慣れても5回、慣れなければその倍数だけ聴くことになる。それにより、結果として覚えてしまい、まるで自分の体験のように感じるほどになることを著者は経験的に知っている。今回も、生徒に尋ねるとそのようであった。トランスクリプト作成作業では、発話そのままの再現を求め、特に方言や固有名詞については、地域内での「わがこと」感を保全するために重要なので、正確な再現を依頼した。

鉛筆手書きのトランスクリプトは、「味がある」教育・学生の成果ではあるが、内容を共有するには適していない。中学生には困難を伴い、中学教師には通常業務を越えるため、愛媛大学側ですべてのトランスクリプトをテキスト電子化した。

それらのトランスクリプトを基にして、特に驚いたことや感心・感動したことを班員各自で選んで、班員の中で選定し、トランスクリプトを選択・使用して、短い話を構成するように指示した。この短い話とは、中学生によるこれら地域の災害エスノグラフィーである。選定までは全員で、選定後は、(班員の多いところでは)ストーリー班とマップ班に分け、エスノグラフィーを作成するストーリー班、また、当該住民の住む地域の地図を地理院地図をベースに、別情報源である土砂災害と洪水ハザードマップ情報を並列することで作成し、被害の様子を記入するマップ班がそれぞれを担当して作成した。

体験災害マップの構成には、著者らと中学校教師で話し合いを重ねた。中学生の感性を重視したい著者らに対して、ある程度の「型」と「手本」が必要とする教師の意向があり、それに応えるため、最終的な体験災害マップは、発表を模造紙(四六版, 788×1091mm)で行うこと、作業は普及版のカラプリンター(A4判)を用いることから、地図関係、エスノグラフィー、写真などは、A4横、A5縦、A6横の組み合わせで構成した。また、住民1名に対応する1枚の体験災害マップには、伝えたい内容を住民の言葉(トランスクリプト)から選び出し10文字タイトルを付けることを中学生に指示した。図-1に体験災害ハザードマップの例を示す。

2020年1月14日、マップ構成に関して著者らによる最後の授業を実施して、残りの総合学習の授業時間で完成までこぎ着け、2月20日に2・3年生、地域住民、宇和島市教育関係者の見守る中、体育館で発表会が実施された。発表会は、2地区1ブースとして、6ブースを順番に回るというもので、1年生は6回同じ発表をし、聴講者は6ブース全てを回り発表聴講とマップ観覧をした。

また、終了後、1・2・3年生に質問票調査を実施したところ、1年生に地域の災害に関する認知度、関心、伝承への積極性が高まっていることがわかった。

4. 結論

平成30年7月豪雨で甚大な被害を経験した宇和島市吉田町にある吉田中学校の1年生を対象に、災害体験の地域内共有と後世への災害伝承を目的とした防災学習・地域学習を実践することを目標にして、「総合的な学習の時間」を利用した教育・学習のパッケージを中学校と共同で開発し、実践して完遂でき、また、教育効果があることも確認できた。この教育・学習パッケージは災害を経験した地域での学習や伝承に有効と考えられる。



図-1 体験災害ハザードマップの例